

「黄昏の太宰府」便り（第3回）

—地方都市が生き残るための条件とは②—

長濱和代（日本経済大学経営学部教員）

前回のコラムでは「地方都市が生き残るための条件とは①」として、地域を活性化させるためには人の往来が必要であることを書いた。そのためには、魅力あふれる地域の良さをアピールして、私たちが訪問したいと思える場所をいくつも併せ持つ必要性を考え、とりわけ「場所」としての観光資源と「人」としての人的資源について考察した。

地方都市の生き残り戦略において、さらに重要なのはお金の往来、つまり経済性を考えることが肝要であろう。太宰府市では、企業誘致に力を注いでおり、今年度第1回目の議会では、市長の施政方針で「企業誘致・起業創業支援の推進」として、令和3年度から市内で企業誘致プロジェクトチームを発足させ、企業誘致へ向けた取組や調査研究を進めているとのことであった。（令和4年度第1回太宰府市長「施政方針」より）。太宰府市では、その誘致活動の候補の一つとして、アニメ産業の誘致、太宰府ゆかりの作家や作品を紹介するコーナーを市民図書館に設置して、市内の高校・大学との連携も模索するとの案を掲げている。

太宰府市内には、5つの私立の大学および短期大学がある。大学も企業の一つであり、大学における経済的豊かさは、教育研究活動の推進との両輪をなすと考えられる。大学を拠点として外から学生たちを集めることは、その地域を活性化させるのではないか。

今回は地方の私立大学の経営の取り組みとその実態から、地方都市が生き残るための条件を考える。

1. 地域の外から人を集める—学生は大切なお客さま

私立大学が国公立大学とは異なるのは、一定数の学生、つまりお客さまがいなければ、経営が成立しないことである。そのため大学に収容可能な限りの学生に入学いただき、数年間の在籍期間により学修を積んで、継続的に学費を払っていただくことが肝要である。しかし毎年80~100万円となる学費を払えるほど、経済的に余裕のある家庭は多くない。日本学生支援機構（JASSO）の「平成30年度 学生生活調査」によると、

奨学金を受給している学生の割合は、大学で約47.5%、短期大学で約55.2%（昼間部）で、大学生の二人に一人は奨学金を必要としている。返済を必要とする奨学金の場合は、借金をして大学に行くことになる。果たして大学にはその価値があるのだろうか。

私たちは高校を訪問する時「奨学金を借りても、大学に行く価値は多いにある。」と答えている。なぜなら、高等教育を受けることにより蓄積されるのは知的財産だけでなく、生涯総年収においても同様である。大学卒業から定年まで仕事を継続

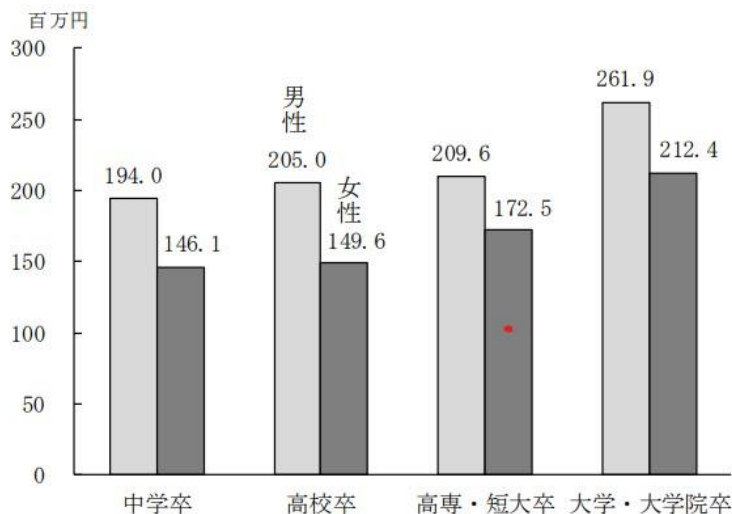


図1 60才までの生涯賃金（退職金を含まず、卒業後に60才まで退職せずフルタイムの正社員を続ける場合）
出典：労働政策研究・研究機構（2022）

した場合、最新のデータでは、男女ともに大卒・院卒者は、高卒者よりもおよそ6千万円近く高い（図1）。こうしたデータを元に、高校生には大学進学を勧め、大学中退を考えている大学生には、なんとか大学を卒業するようにと説得を試みている。

勤務先の大学では、2年生の秋頃に大学中退を申し出る学生が急増する。理由は他の進路を見つけたという内容で、アルバイトの仕事を本業にしたいという学生は、大学を辞めようとする理由の3割近くに達する。正社員の仕事に早く就いて、お金を稼ぎたいと思っているように見える。この傾向は日本人だけでなく、留学生にも顕著に現れ、特にネパールやベトナムなどの途上国の留学生は、わずか1万円でも剰余のお金があれば、家族に送金していると聞いている。

卒業までに入学した学生の3割が退学する学年もあるそうで、入学いただいたお客さまである学生にはできる限り残っていただけるよう、「個性の伸展」という目標を掲げ、学生への個別指導を徹底することにより、教育サービスを充実させている。

2. お客さまへのサービス～学生は大学で何を学ぶのか

本学の6割の学生は指定校推薦により入学することから、推薦されるだけの得意分野がある学生が少なくない。最も多いのはスポーツによる推薦で、野球、サッカー、テニス、バスケなどの強豪高校から学生たちがスカウト、または推薦を受けて入学する。中でも野球やサッカーの特待生の学生たちは、プロを志す者もいるが、卒業後にプロ入りできるのはごく一握りの数名の学生で、挫折感を味わう者も少なくない。私の担当していた学生は野球をするために特待生で入学してきたが、2年目に野球部を辞めることになり、人生の目的を失っていた。しかしラーメン店のアルバイトでやる気を取り戻して、店を任されるようになり、沖縄で出店するために店を任されて大学を辞める決意をした。本人によれば、「大学には（学修のためでなく）野球をするために入ったのだから、大学ではアルバイトを通じて家業を継ぐための実践的な勉強ができて、良い経験を積んだ。」とのことであった。そこには大学生としての学びがあったのかは疑問であるが、友人はでき、講義は難しく、高校より大学は自由度が高い（ゆえに不親切でつまらない）ということを学んだのではないかと。大学経営としてはお客を逃がしたことになるが、教師としては、本人が悩んで自分の道を切り拓いたのだから、これでも良かったと思う。野球においては、似たような学生が他にもいて、退学に至ったケースがあった。高校には、大学への進学がプロスポーツ選手になることを目的とする指導ではなく、将来の可能性を広げるための学びの場であるという指導をお願いしたい。

AIやデジタルビジネスを学びたいという要望で推薦を受けて入学した学生もいる。大学では、デジタルプログラムとサービスを充実させているので、こうした学生は、興味関心が卒業後の就職に有利に働くのではないかとと思われる。大学では学生の選択の幅を広げ学びの意欲を高めようと、様々なコースを用意している（図2）。



図2 様々なコースの提案
出典：日本経済大学（2022）

3. 学生は大学で何がしたいのか？を探る

学生たちは大学でどんな学びや活動がしたいのだろうか。部活、サークル活動、アルバイトなど、私の場合、大学の講義と研究の優先順位は低かった。自分にとって充実した学生生活というのは、毎日、気持ちよく走って、良い成績を出せることであった。膝を故障するほど走り込み、学部時代の後半は長距離から競歩に種目を転向することによって、大学記録を残すことができた。そんな自分を応援してくれる大学とゼミが良いと思ってきた。

本学では2年生の秋に、指導を受けたい先生、つまり自分が学びたい研究室を選択して、3年以降の専門ゼミで学ぶ。しかし学生のほとんどは、研究テーマが決まっていない場合が多く、そのテーマを決めるために、私のゼミでは外に出て研究テーマを探しに行く。研究室によっては、教員の研究を割り振り、継がせる場合もある。私も、森林資源管理や環境課題を解く研究を志す学生に入ってきてほしい。ただ私が学部および院生時代にそうであったように、自分がしたいと思う好きな研究を探究してほしいと願う。

就職希望の学生にはその道を支援までするのも、お客さまサービスの最終段階となる。つまり就職先を決めることで、社会に出てからの生きるための生活の糧を受けけるのである。私のゼミではネパールやベトナムからの留学生が多数いて、学生のうちはアルバイトで稼ぎ、卒業後は就労ビザを取得して日本の企業で仕事をしたいという希望者が8割を占める。これが難しく、12月になっても留学生の半数近くが、就職活動をしている状態である。日本人学生はほぼ内定が出ており、中には、事業を承継する（家業を継ぐ）者もいる。

4. 教育・指導が優先、研究と自分の仕事は夕方以降

「地方の私立大学では、どこも学生集めが大変だ」と聞いている。大学として利益を上げるには、専任教員の数減らして、受け持ち授業数と担当学生数を増やすことになる。すると私たちの仕事の量も比例して増加する。授業は週に平均7コマで、受け持ち学生数は各学年20名以上を超過し、今期は19名の卒業論文を指導中で、そのうち8割は留学生である。昼間は他に会議や高校営業活動、時期により入試監督やオープンキャンパス、出前講座に審議会委員などの社会貢献活動もあり、昼間はフルタイムで活動しており、自分の研究と仕事は夕方以降になる。夜は疲れて、最近は目も老眼で見えなくなる傾向にあるが、研究ができない（またはしない）教員にはなりたくないの、夜は研究時間に当てて、せっせと論文や本を執筆する。そうすると朝も早い、夜も遅くまで大学に残り、自分が疲弊していくのを感じる。好きなことを継続するには、労力を要するのかもしれない。それでも今年は3冊も本を出版できたのは、今までの研究データと蓄積があったからである。*) 疲れ知らずに研究を幸せと感じられる時間のやりくりを考えたい。

5. 地域と大学が提携するまちづくり

太宰府市では、先に述べた5つの大学で構成する「太宰府キャンパスネットワーク会議」が平成10年から設立され、市民の生涯学習の振興と地域に開かれた魅力あるキャンパスシティの創造をめざしている。その4年後には、加盟大学の代表学生からなる「学生連絡会」が発足し、市内イベントへの参加やボランティア活動、キャンパスフェスタの運営などに積極的に取り組んでいる。平成27年には地域の社会課題の解決をめざして、5つの大学と太宰府市の連携協力に関する協定が締結した（太宰府市HPより）。

大学の教職員たちは、学生たちを全国および九州各地から太宰府へ集めるために、日々、奔走している。こうした私たちの教育と研究の努力の積み重ねが、地域の活性化につながれば幸いである。

*) 文献の紹介

1. 『ヒマラヤの森はなぜ守られたのかーインド・ウッタラーカンド州における森林パンチャーヤトの資源管理ー』九州大学出版会

<https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784798503417>

著者割り（2割引き）あり。「まえがき」と「あとがき」後半は、出版のために書き下ろしたので、比較的読みやすいと思う。

2. 『DX時代の人づくりと学び』 人言洞

降旗信一・金馬国晴・加納寛子・佐々木豊志 編著（長濱は第3章を担当）

<https://www.ningendo.net/books/235/> 12月20日に、教育のDXにかかわる本を共著で出版した。本の紹介では「従来の学校教育、社会教育、企業の人材育成の枠組みを超えた新たな学びと人づくりのビジョンと方法を示すことで、来るべき時代の再創造・再構築に向けた独自の役割を果たす」としている。地域、学校、企業で教育活動に関わられているみなさん、教職を志望されている学生さんらに読んでいただきたい。

3. 『学校教育の未来を切り拓く 探究学習のすべて—PCXRサイクルによる指導原理と評価法』 合同出版環境探究学研究会

<https://www.godo-shuppan.co.jp/book/b607468.html>

著者割り（3割引き）が可能。長濱研究室までご連絡ください。 <https://nagahamakaz.net/contact/>

ヒマラヤの森はなぜ守られたのか

インド・ウッタラーカンド州における森林パンチャーヤトの資源管理

今日、世界的規模で進行する森林資源の減少と解決に向けて、参加型森林管理の重要性が指摘されている。本書では、森林面積が増加に転じているインドの森林パンチャーヤト（森林に関わる住民自治組織）に注目。インド・ヒマラヤ山脈の農山村において、いかに地域の実情に即して森林資源を管理し活用しているのかを、現地で長く調査を続ける著者が明らかにする。

読者対象：森林資源保全、途上国のSDGsやジェンダー問題、コミュニティ林管理、住民自治制度などに関心を持つ読者全般。

主要目次

- 第1章 世界の森林減少と参加型森林管理
森を守るために
- 第2章 州の森林制度と地域規則の展開
森林パンチャーヤトに関する州制度および村落制度の解明
- 第3章 村落での森林利用管理の実際と住民の意識
パンチャーヤト林の管理と利用
- 第4章 森林パンチャーヤトの資源管理における住民組織と参加
ヒマラヤの森はなぜ守られたのか

パンチャーヤト 住民自治組織による 参加型森林管理

長濱 和代（ながはまかずよ）

愛知教育大学教育学部数学科卒業。
筑波大学大学院生命環境科学研究科修了。
東京大学大学院新領域創成科学研究科単位取得退学。
博士（農学、筑波大学）
東京都小学校教員（荒川区・足立区）を経て、
現在、日本経済大学経営学部教授、東京大学大学院農学生命科学研究科農学研究員。

主要著作
編著：『学校教育の未来を切り拓く探究学習のすべて』合同出版、2022 ほか。



2022年11月中旬刊行



申込書

ヒマラヤの森はなぜ守られたのか

ISBN 978-4-7985-0341-7 最寄りの書店や大学生協を通じてご注文ください。

C3061 定価 2,970円 小会へ直接ご注文の場合は、送料として別途500円を申し受けます。

ご住所：〒 —

お名前：

電話番号： — —

冊